

ロートレックとアートになった版画・ポスター展

三菱一号館美術館（東京・丸の内） 2017. 10. 18～2018. 01. 08

「版画」は、これまで情報伝達や複製の手段でしかなかったが、19世紀末のパリでは“新たな芸術表現を切り拓く重要なメディアのひとつ”となった。

「アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック」（1861～1901）は、フランスの画家、素描家、石版画家で、1891年ムーラン・ルーージュの作品でデビューした。

画伯は、娼婦、踊り子のような夜の世界の女たちに共感して、彼女らを愛情のこもった筆致で描いた「ポスター」を好んで描き、辛辣で皮肉な石版画はきわめて偉大な芸術性があるものとされ、この功績は多大な芸術性を示したと高く評価された史上特筆される画家である。

《ル・ディヴァン・ジャポネ》 1892年頃 カラー石版画ポスター



作品名は、当時パリで流行していたキャバレー（“長椅子”の意味）の名前で、中央に座る黒いドレスの女性が人気の踊り子「ジャンウ・アヴリル」で、写真の「ポスター（部分）」では、表現が不十分ながら画面に見られる大胆な構図、平面的な色彩などは、画伯が蒐集していた「日本の浮世絵」の影響の一端を示すものとされている。

原画では、画面の中景にはオーケストラが見え、奥の顔の見えない女性は黒い長手袋がトレード・マークの女性歌手で、その後ろの片眼鏡の男性が劇作家・音楽評論家である。「版画」は「絵画」と同じく芸術の域まで高められ、それらを収集する愛好家も出現して画伯の独自の“シルエット”で表現した作品は脚光を浴びて評判が高まった。

ポナール：《フランスシャンパーニュのポスター》 1891年 リトグラフ



「ポナール」（1867～1947）は、パリでは印象主義が一世を風靡しつつあったが、日本の浮世絵の装飾的な表現を取り入れ、ジャポニスム（日本趣味）に傾聴した。

この作品はシャンパーニュ社の募集に入選した初期のポスターの代表作で、女性の髪や衣装にシャンペンの泡が画面を装飾的におい、曲線を強調した「フランス＝シャンパーニュ」という文字が、それらのデザインと非常によくマッチしているのが特徴の作品で高く評価されている。